2026 年 2 月 2 5 日実施
大学院博士課程・Ⅱ期入試
英語問題（自然科学専攻・生態環境科学分野）

模範解答：

ムクドリは歩きながら、時折立ち止まって地面をついばむ。時にはカブトムシの幼虫などの獲物を見つけ、やがて数匹集めると、空腹の子どもたちに餌を与えるため巣へと飛び立つ。

行動生態学を学ぶ者にとって、この行動を観察すると数多くの疑問が浮かぶ。最初の疑問は鳥の採食方法に関するものだ。なぜその特定の場所で採餌を選んだのか？群れではなく単独で行動するのはなぜか？採餌を止め雛に餌を与えるために帰巣する決断に影響するのは何か？ツバメを巣まで追うと、別の疑問が生じる。なぜこの場所を選んだのか？雛はなぜ餌をねだる行動をするのか？親ツバメ二羽は、子育てへの労力の分担をどのように合意するのか？雛はなぜ騒がしく餌をねだるのか？単に各自の空腹度を示しているのか、それとも餌を巡って競っているのか？より長期にわたり観察すれば、繁殖活動と自己維持の労力の配分、季節活動のタイミング、配偶者選択などを決定する要因について問うことも可能になる。

行動生態学はこうした疑問に答える枠組みを提供する。進化論・生態学・行動学の知見を統合し、主に 1960 年代から 70 年代初頭にかけて発展した五つの学派から生まれた。これらを順に論じることで、この主題の簡潔な歴史を提示し、過去 20〜30 年間における考え方の変遷を示す。